

格支配から読む人麻呂歌集旋頭歌

——手力つとめ織れるころもぞ——

工藤力男

はじめに

萬葉集卷第七の中ほどに「旋頭歌」廿四首を収め、あとから二つめに左注「右廿三首柿本朝臣人麻呂之歌集出」がある。本稿ではそのうちの一つ（二八二）を論ずる。寛永版本によつてその歌の本文と訓を掲げる。訓は、本文の右に傍書されてあるものを別提し、二行にわけて左においた。

君爲手力等織在衣服斜春去何何摺者吉

キミカタメテツカララレルコロモキナ、メ

ハルサラハイカニヤイカニスリテハヨケム

この歌について小さな問題が論ぜられることはあつた。しかし、歌全体に大きく踏みこんだ議論は、澤瀉久孝『萬葉集注

釋』以来、すなわち四十数年間ほとんどなされなかつた。

わたしは先年、「新日本古典文学大系」萬葉集の校注作業に携わつたときに疑問をいだいたが、解決に至らぬうちに手離さざるをえなかつた。その疑問を追いつづけてきて、今、一つの解答がえられたように思う。それは、標題にかいたように、動詞の格支配に注目すると新しい読みかたができるということである。その考察の経過をここに報告する。

一

作歌と歌集歌とを問わず、人麻呂関係歌は概してテニヲハを表記することが少ない。その点に着目して、略体歌と常体歌に分類されることがある。この歌も表記されたテニヲハは

多くないが、後述する理由も加わって常体歌とされ、諸家のあいだで意見が対立することはなかったようだ。そのことを頭にいったうえで校本萬葉集によって諸本の本文と訓をみることにする。諸本の略称は、校本に倣って傍線を付した一字で示すことが多い。ここでは訓の片仮名・平仮名を区別せず、おおむね片仮名で表記する。

冒頭の「君」を有力な古写本は「公」に作るの、それが本来の文字であったとする改訂本文が多く行われる。第十字「斜」は、矢が偏の「余」を「金」に作る以外、諸本に大きな違いはない。「何何」の下字は古写本一様に踊り字に作る。結句の「摺」は、細・宮が木偏に、温が「楷」に、廣・春・西が「措」に作る。「措」が本来の文字だとするのが澤瀉「注釋」である。こすりぞめにする意の漢字は「措」なのだ。日本では早い時期に誤用の「摺」も行われて現在に至る。寛永版本も十四箇所すべて「摺」に作る。三卷本色葉字類抄、辞字門スルの第二・三字が「摺・措」であり、このいずれかで通した古写本がない実情で甲乙はつけがたい。訓には差がないので澤瀉「注釋」に従う。

訓については第二句前半の「テツカラ」は不審というほかないが、「勞」の音ラウの頭音が干渉したのだろう。第三句

は元・古・神「コロモキマセヨ」。西・矢・京「コロモキナ、メ」七字は青、仙覚の改訓である。宮・細「コロモアマセヨ」とするのが主な異訓である。いずれにせよ「斜」の訓「ナナメ」では歌意は汲みがない。第五句は「イカニイカニ」がある程度の違いしかない。結句の「スリテハ」には、元・古・神の「スラハカ」が主な異訓である。

続いて諸説をみよう。契沖『萬葉代匠記』は初稿本で第三句を「コロモクタクヌ」と訓じたが、第二句は改訓しなかった。精選本では第二・三句を「タチカラツカレオレルキヌクタツ」かとした。斜をクタクツと読んだのはさすがだと思いが、くたびれた衣を揩り染めにするにはおかしい行為といわざるをえない。賀茂眞淵『萬葉考』は第二句を「テタユクオレル」と訓じた。「力勞」二字をタユシの義訓とみたのは眞淵らしい直感である。だが、第三句を「きぬきせならんといへる也、斜は借り字也」とした「キヌキセナ、メ」の訓では歌意が通らない。橘千蔭『萬葉集略解』は「オリタルキヌヲ」と訓じたうえで本居宣長の説を伝え、「斜」を「料」の誤写とし、「衣服料」三字で「キヌ」とよみ、「タヂカラツカレオリタルキヌヲ」と訓じた。

第五句に相当する訓、荷田春満『萬葉集童蒙抄』の「イツ

チノハナニは「何々」を「何花」の誤写としたものである。「略解」所引宣長の説は「何色」の誤写とした「イカナルイロニ」である。結句について、「代匠記」精選本は多くの古写本の「スラハカヨケム」を非とし、寛永版本の「スリテハヨケム」をよしとした。それに対して『董蒙抄』は「スリナハヨケム」と改訓した。この両訓は完了辞「つ」と「ぬ」との対立である。他動詞「摺る」なら「スリテバ」が優るが、それだけでは終らないことをのちに論ずる。

近代の説をみる。まず井上通泰『萬葉集新考』は、第四句に「春さらば」があるので、花摺という語の存在を根拠に「何花」の誤写として「イカナルハナニ」の訓を提案した。

この解は『萬葉集総釋』（窪田空穂担当）にとられた。鴻巣盛廣『萬葉集全釋』は、旋頭歌は第三句で切るのが本格だととして「略解」の訓オリタルキヌヲを拒否し、「斜」を「叙」の誤写とすると整然たる旋頭歌の歌形になると断じた。折口信夫『口訳萬葉集』では「斜」を「料」の誤写とする説によって第三句を「オレルキヌガネ」と訓じた。

以上のような研究史のうえに冒頭にあげた澤瀉『注釋』がかかれたのである。『注釋』は「斜」が「叙」の誤字だとする「全釋」の説をとる。「織在」には、人麻呂歌集によって

も「オレル・オリタル」の両訓の可能性がある。衣服を「キヌ」にあてた例がなく、この先の人麻呂歌集に「コロモ」とよませた例（二九六）があるので、この訓をとる。すると、「織在」の訓は「オレル」にきまる。第五句の本文については、「色」と「何々」はやや離れすぎて誤字には遠い。また、あれこれと考えることを「イカニカイカニ」と練りかえしたとみるべきではないか、とした。『注釋』の結論を左に掲げる。

本文 公爲手力勞織在衣服叙 春去何々措者吉

釈文 君が爲 手力たぢからつかれ 織れる衣服ぞ 春さらば

いかにいかにかに 摺りてばよけむ

口訳 君に着せようと手の疲れるばかりに織つたこの着物ですよ。春になつたらどんな色に摺つたらよいでせうか。

二

小さな問題、「手力」から始める。前節でみた『注釋』はこれをタチカラと訓じて複合語後項を連濁しない。「時代別国語大辞典上代編」も「たちから」の見出しで「手力」（田

租・租」の二項目をたて、前者の用例には、この歌と「岩戸破る手力もがも」(四一九)と古事記の「天之手力男の神」を掲げる。この三例では連濁していたか否かは分明でないが、萬葉集には他の多くの辞書が掲げる仮名書き例「春の花今は盛りにほふるむ折りてかささむ多治可良毛我母」(三九六五)がある。病む越中守大伴家持の歌である。

後者の古代の用例は意字表記しかみえない。日本書紀では「田租・租・租稻」の文字列にタチカラの古訓がある。名義抄に「税 チカラ」があるが、連濁したか否かは定かでない。手力と田租がひとつ文脈に出現することはまれなので、連濁・不連濁の論議にさしたる意味のないこと、いうまでもない。だが、手力にはタヂカラと読める音仮名表記があるのだから、あえて田租と同じ語形にしておく必要はないだろう。

『注釋』が手力の例に右の二首をあげながら、タチカラと不連濁に訓じた意図はわからない。

次に、やはりさほど大きな問題ではない「衣服」の訓を考える。古代の文献から「きぬ」と「ころも」の違いを明快に指摘することの難しさは、『時代別国語大辞典上代編』が「きぬ」の「考」にいうとおりである。そこで、萬葉集の、さらに人麻呂の表記傾向をみるほかに術がない。以下、順次に番

号をつけて歌をひき、原文表記を傍線部に残す。

- 1 今作る斑衣服面影に我に思ほゆいまだ着ねども(二二九六)

『注釋』は、「衣服」二字をキヌと訓じた例が萬葉集にはみえないこと、人麻呂歌集の1がマダラノコロモ以外には訓じえないことを根拠にしてコロモの訓をとった。

さらに細かなことをいうと、いま一つの訓の可能性も考えるべきであった。

- 2 いにしへゆ挙げてし服も顧みず天の川津に年ぞ経にける(二〇一九)
- 3 あがためと織たなはたつめ女のそのやどに織る白布は織りてけむかも(二〇二七)
- 4 君に逢はず久しき時ゆ織る服の白袴衣垢つくまでしたへこもに(二〇二八)
- 5 柵機の五百機たてて織る布の秋さり衣誰かとり見む(二〇三四)
- 6 いにしへに織りてし八多をこの夕へ衣に縫ひて君待つ我を(二〇六四)
- 7 足玉も手玉もゆらに織る旗を君がみけしに縫ひもあへむかも(二〇六五)

右は、巻第十「秋雜歌」の「七夕」九十八首から、織る行為やその対象が詠みこまれた歌を拾ったものである。2乃至4は人麻呂歌集所出の注がある三十八首の歌群に含まれる。2の「服」は6によつてハタの訓に導かれる。古代語のハタは、織機も、織機にかかつている織物も(2)、織りあげた布地も(4・6・7)さしたようである。

これによると、「注釋」は言及していないが、当該歌の「衣服」の訓としてハタの可能性も考慮すべきであった、といえるだろう。この段階では、キヌ、ハタ、コロモの三つの訓が考えうることになる。

第三句に残る問題を続けて検討する。

古写本の本文「斜」に対して「料」「叙」の誤字説のあることは既にのべた。もう細かな説明は省くが、旋頭歌は第三句でできることが本格だとした「全釋」の説に従つてよいと考える。あえて一言すると、当該歌を含む旋頭歌群の第二首に次の歌がある。

住の江の波豆麻の公の馬乗衣さびづらふ漢女を握えて
縫衣叙たもとせ(一一七三)

波豆麻の公は未詳の固有名詞とおほしいが、歌末の「叙」は動かない。これは人麻呂歌集において断定辞「ぞ」を「叙」

で表記した動かぬ証拠といふべきである。音仮名表記の助詞があるので、この歌は常体歌とされる。

「叙」が「ぞ」を記した文字だとなると、当該歌の第三句「織在衣服ぞ」の訓には、オリタルキヌゾ・オリタルハタゾ・オレルコロモンという三つの組み合わせが可能となる。

ここで新たな問題に逢着する。古代語における存続・完了の辞「り」と「たり」の消長である。これについて、学界ではおおよその結論に達している。記紀歌謡に「り」は四十ほどの用例があるが、「たり」はみることがない。萬葉集で「り」「たり」を下接させる動詞の比率は、語数でほぼ三対一、用例数でほぼ六対一、圧倒的に「り」が優勢である。両方を下接させることが多い動詞は「咲く」で、用例数は三十三対二十二である。巻第五の「梅花歌」から一例ずつをあげる。原文は音仮名表記なので訓には疑義がない。

梅の花今咲けること散り過ぎず我が家の園にありこせぬ
かも(八一六)

梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべく成りにけらず
や(八一七)

「り」には承接上いろいろな制約があるので、次第に汎用性の高い「たり」にその座を譲つたと解釈されている。厳密な

定形詩とはいえない記紀歌謡に「たり」がみえず「り」専用であることは、この二語の消長をいみじくも語っている。定形を基本とする萬葉集の歌では両語を有することはたいそう便利なことであつたらう。

さて、やはり『注釋』にいうように、人麻呂歌集で「在」を「たり」にあてた「持在白玉」(二三〇二)・「霧惑在」(二八九二)もある。だが、新興の「たり」は音数律の隘路に陥つた時の切り札とすべきで、旧勢力「り」でよめるなら、それによるべきである。しかも、人麻呂歌集に「衣服」をキヌ・ハタに用いた確かな例はみえないのだし。

かくて、消去法による第三句の訓は「おれるころもぞ」が無難だということになる。

三

ここまでは澤瀉『注釋』の説をなぞつて証明しなおしたにすぎないが、『注釋』の解がすべて適切だと考えているわけではない。

第五句「何々／何何」を考える。萬葉集には『注釋』がよしとしたイカニカイカニがない。後世の歌はどうであつたか

というと、『新編国歌大観』十巻を検してもそれはみえない。つまり、イカニカイカニは日本の和歌には用いにくい句だつたらしいのである。ならば『注釋』が拒んだイカニヤイカニはどうだろうか。

同様に『新編国歌大観』を検すると、イカニヤイカニを用いた歌は十三首を数えるが、実質的な歌数は微少である。初出は後撰集の次の歌である(括弧内の漢数字は歌番号)。

世中はいかにやいかに「風のおとをきくにも今は物やかなしき(二一九二)

第二句末に鉤をつけたのは、そこで句がきれていること明らかだからである。本居宣長は『詞の玉の緒』四の巻「何を重ぬる格」の項の第一首にこの歌をあげた。この型の歌は他に五首。最も新しい歌は松永貞徳『逍遙集』にみえる。句切れのない歌は拾遺集にある。

世中をかく言ひ——の果て——はいかにやいかにならん
とすらん(五〇七)

イカニヤイカニは結句に係る修飾語として機能している。だが一見して明らかのように、この歌は同語反復に興を覚えて詠んだふしがあるのみならず、同歌集の「哀傷」と「拾遺抄」に重出するほか、『宝物集』『源氏注』にもみえる。つま

り五首で一首なのである。同語反復といえは、隆房集の「あなこひし恋しやこひしこひしさにいかにやいかにいかにせん」は言葉遊びになつてゐる。残るは重家集の「祝十首」の一首だけである。

きみが世をいかにやいかにいははましちよも八千代も猶しあかねば(一四二)

このように、萬葉集古写本のイカニカイカニが確定的な訓になりえず、イカニヤイカニも平安朝以後の和歌にさえ実に寥々たる用例しかみることができないのはなぜか。不在証明が必要であらう。

不定詞の反復は必ずしも語基の有する意味を強めることにはならず、概念的な意味に転じたり、感動詞・応答詞に転じたりすることが多い。「われはいかにいかにとうしろめたく思ふに」(かげろふ日記・中)の傍線部を、引用の助詞「と」でうけているのがその例である。山口堯二「日本語疑問表現通史」はこの領域の総括的な研究である。同書では、相手に呼びかけてその返事を促す一語文的表現の例、催促の働きにおいて呼掛語への傾きも認めることができる例などを指摘した。さらに「いづらいづら」には、対自的な意志発動の呼掛語性が認められる例や、感動語寄りに解してよいのではないかと

する例などがあるとした。そして「いかに」の一語文表現に最もめだつものとして、「対話のはじめに用いられる呼掛語である」として、時代は下るが次の例をあげた。

いかにや、太郎くわじや、二郎くわじやもよくきけ

(虎明本狂言・目近籠骨)

当該歌に戻つて、「何々」の「注釋」の訓イカニカイカニでは、せつかくイカニを反復しているのに、副詞性が弱まつて下の述語にかかつてゆく力を失つてゐるように思う。ヤを用いても同じことである。それはなぜか。原因は割に簡単に突きとめられそうである。

「や／か」は係助詞として文中にも、終助詞として文末にも用いられる。文中にあるときは、その下にある述語に結びを要求する。すなわちそこで表現が終結することが期待される助詞である。したがつて、イカニヤイカニ、イカニカイカニのいずれにせよ、「ヤ／カ」をうける下のイカニでもって表現が終結した印象を与えるのである。そう考えると右にみた諸事象、副詞性の弱まりも、呼掛語や感動詞に転ずることと素直に理解することができる。

次に考えるべきは、イカニカイカニが日本の和歌に用いられることがなく、イカニヤイカニも極くわずかの用例しか見

えないことである。これには係助詞「や」と「か」の意味の差が関与しているのだろう。先学の研究ですでに明らかにされたことだが、早い時期の成果である富士谷成章『あゆひ抄』のよく知られた説明をみよう（引用は竹岡正夫『富士谷成章全集』による）。

すべて、里言に「カ」と言ふに、「思ふカ」「問ふカ」の二つあり。「思ふカ」は「か」に当たり、「問ふカ」は「や」に当たれり。（巻一）

これは文末にあるばあいについての説明であるが、この差は文中の位置にかかわらず、両助詞の根本的な性質の違いに由来する。当該歌は歌体による分類で旋頭歌の中にあるが、内容は相聞である。独詠歌と解しえなくもないが、初句「君がため」によつて対詠歌と解すべきかと思う。したがつて疑問辞を用いるなら「問ふヤ」がふさわしい。だが、「いかにやいかに」では、右にのべたように傍点部と傍線部とで係り結びが成立し、叙述がそこでとまつてしまう。当該歌についていうと「摺りてばよけむ」に続かないのである。イカニヤイカニの成りたちにくいことは明らかであろう。

かくて、誤字説によらない『注釋』の潔癖さは尊重するが、ここは「何色」の誤写とする官長の説に従い、「イカナルイ

ロニ」の訓をとりたい。

四

結句に移る。「措者吉」をスリテバとよむのは、元暦校本の訓スラハカの右にある緒の書きいれ「リテハ」をとつたものである。第一節で諸説にみたように、『代匠記』精選本がスラハカを拒否し、『萬葉考』がスリテハを支持した。近年はほとんどの注釈書がスリテバと訓じている。管見の限りでここに踏みこんだ発言は、新編日本古典文学全集本だけである。すなわち「いかなる色に摺りてば良けむ」と訓じ、「どんな色に染めればいいでしょう」と現代語訳したうえで、次の頭注を付している。

ただし、現代語訳に示したように解するには、第五句が「摺らばか良けむ」とあることが望ましい。

古写本元・古・神の訓スラハカをよしとしたわけである。その根拠はかいてないが、不定詞イカナルの力は被修飾語「色」までしか及ばず、結句の疑問は改めて表現すべきだといふのだろう。だが、萬葉集にその形で詠まねなかつた理由には言及しない。

そこで、イカナルとその非縮約形イカニアルの用例を萬葉集に求めて考えてみる。そのいくつかをあげ、仮名表記ならざる当該箇所は本文を残す。

1 はつはつに人を相見て何將有いかにあらむいづれの日にかまたよそに見む(七〇一)

2 いかにあらむ日の時にかも声知らむ人の膝のへ我が枕らかむ(八一〇)

3 幸ひの何有人いかなるか黒髪の白くなるまで妹が声を聞く(一四一一)

これによると、イカナル／イカニアラムは、続く体言「日／人」を不定なるものとして修飾限定するだけであつて、述部にかかる疑問成分には改めて疑問の意を示す辞（二重傍線部）が必要だつたようである。

疑問辞は無表記だが音教律から容易に補読できることもある。4の力である。

4 大船の香取の海に碇おろし何有人いかなるカ物思はざらむ(二四三六)

疑問辞が表記されず補読することもできない二例がある。

5 いかにある布勢の浦そもここだくに君が見せむと我をとどむる(四〇三六)

6 面忘れ何有人いかなるのするものそ我はしかねつ継ぎてし思へば(二五三三)

5は上二句が第三句以下と倒置されて名詞文の述部となつてゐるもの。6は主格「人の」に對する述語が「する」、助詞「そ／ぞ」は文末に用いられた断定辞である。

かく考えた末に残つた萬葉歌は人麻呂歌集略体表記の一首だけである。増書房版の訳文（初版）をそえて掲げる。

7 何名負神幣嚮奉者吾念妹夢谷見(二四一八)

いかならむ名に負ふ神にたむけせば我が思ふ妹を夢にだに見む

前引新編全集本の頭注をここに援用すると、不定詞「何（いかならむ）」の力は第四句以下に及ばず、歌全体の疑問には改めて疑問辞が必要なはずだ、というのだろう。7では現実にはほとんどの古写本、寛永版本も第三句もタムケハカと訓じ、夫木和歌抄にもその形で載っている。力を補読したのである。

この歌の前後の短歌に「誰たがとにも 為(二四一六)」「誰故たがゆか」(二四二四)のように力を補読した例がある。三首はともに人麻呂歌集歌で、この二例は「誰＋形式体言」に続く位置であるが、7はそれと異なり、疑問辞力を補読するのは無理である。江戸時代の諸注はこの訓に言及せず、近代は右の釈文のよう

にタムケセバをとつている。新編全集本はこの歌について特に注意してはいない。

探索の手を三代集に広げる。『新編国歌大観』から用例をあげ、「ヤ／カ」に二重傍線を付し、歌集名の頭字と歌番号を括弧書きする。

8 いかならむ巖の中に住まばかは世の憂きことの聞こえ来ざらむ (古・九五二)

9 いかなりし節にか糸の乱れけむ強ひて繰れども解けず見ゆるは (後・一一六二)

10 いかならむ折節にかは具竹の夜は恋しき人にあひ見む (拾・八〇五)

右のごとく萬葉歌と同じ様相を呈するので、新編全集本の注は有効であるようにみえる。

ここで富士谷成章の考えをみよう。「かざし抄」の「いかなる」の項に掲げた例歌四首のうち、連体修飾句をなす初めの三首がこの形に相当する。

11 此さとにいかなる人か家あして山ほと、きすたえすきくらん (捨)

12 いかならんいはほの中にすまはかは世のうき事のきこえこさらん (古)

13 あはさりし時いかなりし物とてかた、今のまも見ねはこひしき (後)

三首とも主文の述語にかかる語句は疑問辞「か／かは」をもつ。12・13の「か／かは」には圈点がうつつである。11の「か」にないのは誤脱ではあるまいか。

「里にへどの〜といふ」の和らげを添えた「いつれの」の例歌は次の二首である。

14 あをやきのいとよりはへておるはたをいつれの山のうくひすかきる (後)

15 このねにみねの松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけむ (捨)

見てのとおり、15は「や／か」を伴わない。

本居宣長『詞の玉緒』四の巻の「何の類」八ヶ条には多くの不定詞があげてある。係りと受けの関係を論じた書だけあって、「○何の下におく か かは」には「何等の辞をおきて。その下の結びとの間に。かもじをはさむこと常におほし」とし、例歌九首すべてこの形である。「●いかに」の項で「いかならん」に切る、と切れざるとあり」として「切れず下へつゞく」16を例にあげた(引用は筑摩書房版『本居宣長全集』による)。

16 いかならんいはほの中にすまばかは世のうき事の聞
えござらん。(古)

これは12と同じ歌である。

さて、拾遺集には10と対応する形で排列された17がある。

17 いかなりしとき呉竹の一夜だにいたづらぶしを苦し

といふらん(八〇四)

17は歌の構造が10と酷似するが、疑問辞をもたない点が異なる。それは萬葉歌で例外とした7と共通し、「かざし抄」の例歌15にも通ずる。だが、17は「らむ」で結ばれている。推量辞「らむ」をもつ歌というとなたしがすぐに思いうかべるのが18である。

18 ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散る

らむ(古今集・巻第二)

「らむ」は、実現した事態に対してその理由や原因について思いを巡らす語、いわば疑問の意を内包する推量辞であった。一方、15・17は不定詞を連体修飾句として含みながら、述部に係る疑問辞「や／か」がなく、主文に推量辞「らむ」も存しないが、推量辞「む／ん」「けむ」で結ばれている。この構文は古代和歌に許容されたと考えてよいだろう。

略体表記の人麻呂歌集歌7の「幣禰奉者」に疑問辞「か」

を補読することは無理である。だが、「夢谷見」の訓「いめにだにみむ」は、推量辞「む」を含んで自然である。当該歌の結句「摺者吉」に推量辞「む」を補なうのも自然なよみである。それなら、もはや疑問辞を補読する必要はなく、「スリテバ」でよいのだという結論になる。

五

第二句に戻る。古写本の訓テツカラが論外であること、『萬葉考』がテタユクという義訓を提出したが、続く「織在衣服斜」の訓オレルキヌキセナメは無理であること、今は『代匠記』精選本のタチカラツカレが専ら行われていることは第一節にのべた。

先に澤瀉『注釋』の口訳を示したので、他の注釈書からその句だけを見るとしよう。

手が疲れるまでにして(全註釋)

手も疲れて(大系本)

手も疲れるほど(和歌文学大系本)

このように、なぜか「手力」の「力」が訳出されていない。

それを訳出したものに佐佐木信綱『萬葉集評釋』の「疲れて

手の力も無くなるほど骨を折つて」がある。だが、もとの歌にはない語句「無くなる」「骨を折つて」を補っているので、直接の参考にはならない。土屋文明『萬葉集私注』では「タヂカラは手の力を用ゐる労働」と注して「働きつかれて」と訳出し、「手力」を省いている。それを省かずに訳出した『萬葉集全注』（渡瀬昌忠担当）には「手の力も疲れきつて（苦勞して）」とある。伊藤博『萬葉集釋注』は「手力疲れ」はなかなかいい表現だとしている。だが、手の力は疲れれるものだろうか。

注釈家たちは「手力疲れ」をおかしな表現だと思わなかったのか、その旨を記したものはほとんどない。わずかに古典文学全集本の注にそれがみえるだけである。

「裳の裾濡れて鮎か釣るらむ」（八六二）と同じ語法。

新大系本は右にならつてさらに詳しく次のようにかいた。

「疲れ」は他動詞の用法。下二段動詞は、自動詞の用法と他動詞の用法と、いずれにも用いる。「人に知れつつ」

（二四四六「我を音ねし泣くる」三三六二或本歌・三四七二）

これは、平安和歌の「根を絶えて」などの解釈にあたって議論されたことである。ここで本格的に論ずる意図はないので深入りはしない。結論だけのべると、四段・下二段の両活用

をもつ「知る」「泣く」のたぐいと、下二段活用だけの自動詞「濡る」「絶ゆ」のたぐいとは別に扱うべきである。この説明どおりにこの第二句を訳したら、「手力を疲れさせて」となるはずだが、これも自然な日本語とはいえない。かくて、「手力」「疲れ」ともに生かして訳出すべき手だてはないので、根底から考えなおしたい。

現代語に「手力」という語は用いないので、「手の力」に置きかえて「手力疲れ織りたるきぬぞ」を直訳すると、例えば次のようになるだろう。

手の力が疲れて織った布だ。

これは右にひいた多くの注釈書の訳に似ているが、わたしの語感はこちらを非文とする。手を使って己れの力を引きだし、力を費やして何かの動作をする、その結果として手が疲れる、それが順序であろう。他の語で同型の文を作ってみよう。

脚力が痺れて蹴倒した立ち木だ。

立ち木を倒すために足で強く蹴る動作をした結果として足が痺れることになるはずで、それを右のように表現することはあるまい。次の文も同じである。

視力が疲れて書写したノートだ。

当該歌には当然のこととして省かれている動作主を補って、

右にのべたことを文の形に膨らませて考えよう。

A₁ (わたしが) 手の力が疲れ、織った布です。

A₁で表現しようとした真の内容はおそらくA₂であろう。

A₂ (わたしが) 手が疲れるまで力を傾けて織った布です。

A₁の奇妙さはB₁の奇妙さと同じである。

B₁ (創業者が) 家の財産が傾き、創めた会社です。

これは次のように表現すべきであろう。

B₂ (創業者が) 家産が傾くほど金をかけて創めた会社です。

A₂を基準にして当該歌を考えるさいに留意すべきは、「手力」すなわち「手の力」なのだから、これを受ける動詞は主格助詞「が」を支配するのではあるまい、と視点をかえてみることである。ここに参照しうる一つの口訳、「完訳日本の古典」本の上三句を掲げる。

あなたのために 力を尽くして 織った服ですよ

右の口訳は、原歌の「手力」に対格助詞「を」をつけ「疲れ」を他動詞「尽くし」に置きかえた形である。これはA₂の分析と類似する。だが、この口訳を提出するにさいしていかなる配慮がはたらいたのか、注には記していない。

「労」はありふれた文字であり、訓の「つかる」も特異な

ものではない。續日本紀の第三詔「朕御身勞坐故」の「労」は、第四十五詔の「朕^疲御身都可良之^ス於保麻之麻須」の仮名書きに対応してもいる。この記憶などが訓釈に影響したのではないか。

字書にあたってみよう。観智院本類聚名義抄は二ヶ所に「勞」を掲出する。

勞 力高反 イタハル ツカル ヤマシ 疾也 劇也

〔以下略〕(僧上83)

勞 郎到反 ツトム イトナム イコフ モノウシ ヤ

スヤマヒ イタハル イタハシ ツカマツル ツカ

ル タシナフ (佛下末38)

右にみるように後者の和訓の筆頭はツトムである。

三卷本色葉字類抄で「ツカル」「ツトム」の字を検する。

勤^{ツトム} 精 格 榮 (中略) 勞 (以下略) (前田本中22ウ)

疲^{ツカル} 羸^{ツカル} 窮 (中略) 卒 瘦 勞 (以下略) (同右)

ツトムの項は「勤」を筆頭字に四十五字を収めた第三十三位が「勞」、ツカルの項は「疲」を筆頭に五十三字を収めた第六位に「勞」がある。

漢籍からの訓話の例として、数ヶ所にみえる玄應「一切経音義」から「爾雅 勞、勤也。勞、力極也」(卷九)をひけば

充分だろう(汲古書院版「古辞書音義集成」第七卷)。

以上の検討から、当該歌の「勞」を「手力(ガ)つかる」

ならぬ「手力(を)つとむ」と解すべきではないか、とわたしは考えるのである。それを古代の用例によって検証しよう。萬葉集の「つとむ」の用例二つのうちの一つは、石川女郎が足を病む大伴田主に贈った歌にみえる。

我が聞きし耳によく似る葦のうれの足引く我が背勤多扶
倍思(二二八)

「勤」の訓ツトメに異訓はない。お大事になさい、しっかりとしなさい、などと現代語訳されている。これと少し異なるかと思われる用例が佛足石歌の一首にみえる。

人の身は得難くあれば法のたの縁えだしとなれり都止米もろ
もろ進めもろもろ

何に、あるいは何をつとめるかはよまれていないが、この歌では仏道のための営みであることが自明なだろう。日本書紀・中巻第十九縁「増信因果、慇懃誦持、昼夜不息」の「慇懃」を、群書類従本の訓注にネモコロニツトメテとするのも同様である。日本書紀・雄略八年二月の「膳臣等乃自力勞軍」の「自力」に古訓ツトメテがある。これらの用例について、辞書が現代語「努力する、はげむ」を与えたり、「力

を尽くして何かを行うことを言う」などと記述するのは当然である。

平安時代の「つとむ」の用例のほとんどが前引の佛足石歌のように仏道修行をいう。辞書も語義の一つを「仏道にはげむこと」と記述するほどで、「あけくれ勤め給ふやうなれど」(源氏物語・匂宮)などは文脈なしに理解しうる。それとは異なる用例をあげる。

この御宿直所の宮仕へをつとめ給ふ(源氏物語・帯木)

吉キ女ヲ求メテ御祭ヲ可勉キ也ト云テ(今昔物語・巻第十
一三三)

これらは「つとめる」対象が仏道から「宮仕へ」や「御祭」にかわつたにすぎない。

右の記述や用例からずれている、とわたしの判断するのが萬葉集の残る一例である。

しきしまの大和の国に明らけき名に負ふ伴の緒心都刀米
与(四四六六)

淡海真人三船の讒言で大伴古慈斐が出雲守を解任されたとき、家長である大伴家持がよんだ、長歌と二首の短歌からなる「族を諭す歌」の一つである。大系本は「心を励まして一層努めなさい」、「釋注」は「心を励ましなさい、奮い立ちなさい」

い」と訳している。努める行為主体のありかたを「心努め」と表現した、そう解したような訳文である。

漢文訓読文に手を広げて「つとむ」の用例を探してみた。

初めに中田祝夫『古點本の國語學的研究』から得たいくつかを示そう。平仮名の訓はヲコト点、仮名の括弧書きは補説である。連字符は省く。

努^ヅメ(て) 至教^{アキウ}を詳^{アキウ}メ、彼の紛執を釋す。(大乘大集地藏

十輪經・序品ノ二)

即時奔競(と) いふは者、互相に勤^ムメ勉^ムマシシこと

(を) いふ。(法華玄贊・卷第六)

而して釋勤^{シクム}(する) こと懈^ムラ不(リ) シカバ(大唐西域

記・卷第五)

右には格支配せぬものをあげた。次に築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究』の例をひこう。

性^{ヒト、ナリテムカシ}、恬^{ヒト、ナリテムカシ}簡^{ヒト、ナリテムカシ}ニシテ榮進^{シテ}を努^ムムルコト無し(卷二)

苦ニ於テ安忍シテ經論ヲ勤^ムメ宣(ヘ) ヨ(卷三)

專^ムラ翻譯ヲ努^ム(メ) テ寸陰ヲ棄(ツルコト) 無(シ) (卷七)

ヲ格支配の右の例のほかは次に次の用例がある。

亦高志ニ違(ハ) 不^シ、力(ヲ) 努^ム(ム) 可^シ (卷六)

築島氏の譯文篇の写真は鮮明で、訳文に疑いを差しはさむ余

地はない、とわたしはみている。動詞「努む」に格助詞は表記されていないが、補読するとしたら「ヲ」しかないと思築島氏が判断したのは当然である。

手元にあるのは寥々たる用例にすぎない。ことの真相は日本語の遠い過去の闇に隠れてしまっている。したがって厳密な論証は諦めなくてはならないが、そこに能う限り探りをいれてみたい。動詞「つとむ」を自動詞とする辞書が圧倒的に多い。だが、家持の「心つとめよ」、三藏法師伝の「力を努むべし」、石川女郎の「つとめたべし」を凝視していると、わたしには一つの道筋がみえてくる。

現代語では二格支配の自動詞用法が一般であるが、古代語の表現は別の考え方を蔵しているようだ。つとめることは当然その行為のむかう対象をさすばあいが多かった。だが、現代語訳にみえる「努力」という熟語がいみじくも示すように、何かにむかう主体の行為は容易に実現するわけではなく、それなりに負担を伴うことが多い。それは己れの心や肉体が担うべきものであろう。それは自明のこととして表現するまでもないばあいが大半なのだ。そう解することによって初めて、右の挙例を矛盾なく説明することができる。

石川女郎の「つとめたべし」を世話に和らげると、「お

大事に」といった感じであろう。生活全般において無理をしないこと、換言すると心や体の使い方に配慮することである。家持の歌では、政敵の毘にはまらぬように心配りをして行動せよと諭したのである。当該歌の機織り行為は体を動かし、特に手の力を費やすことである。それを「手力つとめ」と表現するのはいかにも自然な詠出である。この歌は歌体によって分類されているが、内容は相聞である。己れの行動を大袈裟に恩着せがましくよむことは相聞の常道であった。先にひいた「完訳日本の古典」本の口訳、手の「力を尽くして」が適当だということになる。かくて、当該歌の「勞」は「ツトメ」と訓じていいのではないか。

動詞がいかなる格助詞を取るかは時代によって異なることがあり、決して単純ではない。かつてわたしは、古代のヲ支配から中性以降はニ支配にかわった「背く」について考え（「格助詞と動詞との相聞についての通時的考察」、『日本語史の諸相』に再録）、古代語の「仕ふ」がヲ支配する例もあることに着目して萬葉歌（五三）を考えた（西宮一民編『上代語と表記』所収「鶴・西宮法則の剰余——大宮仕へ安礼衝くや考——」）。本稿は、そういう視点からこの歌を読みなおして達した結論である。

おわりに

萬葉集巻第七の旋頭歌の一首（二八二）について考えた結果をまとめると左記のとおりである。

初句、寛永版本の本文は「君」とあるが、多くの古写本に従って「公」をとる。

第三句、「織在」は完了辞「たり」よりも、古い「り」の接した形をよしとする。よって「衣服」の訓は「ころも」にさまる。この歌が旋頭歌であることから、「斜」が「叙」の誤写であるとした『萬葉集全釋』の説は動かない。

第五句、古写本の本文「何々」による訓イカニヤイカニ、澤瀉「注釋」のイカニカイカニはともに不適当なので、「何色」の誤写とする宣長の説「いかなる色に」をとる。

結句の「摺者」は本来「措者」とあったと判断した。その訓はスラバカとする疑問辞カの補読は無理で、その必要もない。スリテバヨケムは許された構文である。

第二句「手力勞」を「手力つかれ」と訓ずる通説は、動詞の格支配の論理にあわない。「勞」にはツトムの訓、大伴家持作歌にも「心つとめよ」があるので、「手力つとめ」と訓

ずる。口訳は「手力を尽くして／注いで／傾けて」などが適當である。

よって、この歌の本文と訓は左記のようにあるべきである。

公為手力勞織在衣服叙 春去何色措者吉

君がため手力つとめ織れる衣ぞ 春さらばいかなる色
に措りては良けむ

付記 本稿は、「助字から見た萬葉歌——満ち缺けすれそ人の常なき——」(『成城文藝』百九十五号 2009)に続く「新日本古典文学大系『萬葉集』校注拾遺の七」にあたる。